川あそび情報誌

第３号

TAKE FREE

九州かわとも

第１回九州川の風景フォトコンテスト Facebook 部門「いいね！賞」受賞作品
福岡県　七福川

やっぱり川へ行こう！

特集

令和２年７月豪雨で活躍した「次世代」

川の先駆者

コロナ禍での活動

CONTENTS

02　川の応援団／鹿児島県さつま町長　日高 正勝

● 特集／令和２年７月豪雨で活躍した次世代

06　NPO 法人　リエラ
08　NPO 法人　球磨川アドベンチャーやつしろ
10　防災・災害支援チーム

● 特集／川の先駆者

14　駄田井 正さん／NPO法人筑後川流域連携倶楽部・理事長
16　松尾 一四さん／笹尾川水辺の楽校運営協議会・会長
18　杢下 信芳さん／NPO法人都城大淀川サミット･前理事長
20　小浜 昭二さん／姶良川河川愛護会・第４代目会長

● 流域じまん

24　高来そば
26　初代筑後藩主「田中吉政公」と水郷「柳川」
28　大淀川学習館
30　ななせダム
32　松浦川

● 特集／コロナ禍での活動

36　田川ふるさと川づくり交流会
38　球磨川ツクシイバラの会
40　第３回遠賀川流域フェスタ・ナイトリバー

42　九州 川の風景フォトコンテスト
44　川の名前の由来
46　協賛企業一覧
47　編集後記

川の応援団

鹿児島県さつま町長　日高（ひだか） 政勝（まさかつ）

「九州かわとも」第３号の発刊、誠におめでとうございます。悠久の流れ、母なる川内川の中流域についてご紹介いたします。さつま町は、鹿児島県の北西部、薩摩半島のへそに位置し、町の北部には霊峰と崇める紫尾山（標高1,067ｍ）がそびえ、ここから分岐する山々に囲まれた盆地で、東西27.3km、南北22km、総面積は、303.90㎢あり、国道が3本中央部を交差し利便性の高い町です。

また，町のほぼ中心部を南九州一の大河である川内川が貫流し、豊かな大地に寒暖差もあって、おいしい農作物が四季折々に生産される食の宝庫です。特に川内川の川霧に育まれたお茶を始め、ブドウ、梨、ミカン、マンゴーなどの果樹、豊富な竹林面積を生かした日本一の超早堀筍の産地、九州一の栽培面積を誇る南高梅（薩摩西郷梅）の産地、これらの特産品や竹製品、鶴田和紙、薩摩切子の伝統工芸品、そして当地方を統治していた島津家の城跡と国の指定文化財である巨大な累代の墓石群などの史跡の数々、さらには名湯１００選に選ばれた泉質の優れた温泉が散在し、魅力あふれる町です。中でも住民は恵まれた自然環境もあって気質も穏やかでやさしい心持ちの親切心旺盛な人が多く、転勤族の皆さんからは「たいへん住みやすいまち」としての評価をいただいています。

こんな風光明媚なさつま町ですが、今から１４年前の平成１８年７月の鹿児島県北部豪雨では川内川が氾濫し、特に被害が大きかった町の中心部宮之城地区では９３９戸にも及ぶ家屋が流出、浸水するなど甚大な被害を受け、自衛隊や消防団に救助されました。その後、国の激特事業による河川堤防、分水路開設、輪中堤などのハード整備や鶴田ダム再開発事業が行われ、洪水に対する治水安全度は向上しましたが、近年の異常気象に鑑み、いつ起こるか分からない水害に備え、さつま町としても災害に強いまちづくりに取り組んで参りました。

観光という面でも、さつま町は川内川と関わりが深く、特に毎年５月中旬から「奥薩摩のホタル舟」など2箇所で運航されます。川内川は、日本でも有数の蛍の里で川の両岸を無数の源氏ホタルが乱舞し、ホタル舟では、川の上流から約２キロの流れを舟でゆったりと下りながらホタルを眺めたり、遊覧できます。例年県内外から多くの観光客が訪れる人気のイベントで、その幻想的な風景は、さつま町の初夏の風物詩となっています。国土交通省のかわまちづくり事業で、ホタル舟「乗舟場」も整備していただき、利用者の安全性も高まり、感謝しているところです。

また、川における活動も盛んで、整備された河川空間を利用し元旦には歴史伝統のある「初泳ぎ」、夏場には、河川協力団体である「ひっ翔べ！奥さつま探検隊」が主催する「いかだ下り」や漁協主催の「鮎祭り」、地域開催の「魚のつかみ捕り大会」、「トライ（虎居）アスロン」、小学校開催の「校内持久走大会」など様々なイベントが開催され多くの町民に愛されています。

さて、私の小さい頃は、川内川の支流で、夏場は幼児から小中学生一同で、川泳ぎや魚捕り、盆ガママなど一日の殆んどを過ごし、異年齢のつながりが深まる思い出深い川と共に成長する場所となっていました。泳ぎも小学生に進学するまで皆んな泳げる状態になっていました。

最後に河川協力団体をはじめ九州各地で河川活動に取り組まれている皆さんのご活躍と川を愛する心が広く浸透することを祈念しまして結びとさせていただきます。

特集

令和2年7月豪雨で活躍した 次世代

令和２年７月豪雨では九州各地で甚大な出水が発生しました。新型コロナウィルス感染拡大で県外からのボランティア受入れなど様々な制限が入り復旧活動が難しい中、球磨川流域、筑後川流域では次世代が中心となり発災当初から様々な復旧支援活動が行われてきました。

そして、「防災・災害支援チーム」という新しい取り組みも生まれました。令和２年７月豪雨の中各地で活躍された次世代の皆さんを特集します。

令和２年７月豪雨で活躍した
次世代 Vol.1

NPO法人 リエラ

大分県日田市天瀬町（おおいた ひた あまがせまち）

災害ボランティアセンターの立ち上げ

九州北部豪雨から3年が経つ7月5日、「3年が経ってまだまただけど復興に向けて頑張ろう」と話した住民さんとその翌日から避難所に行きました。

その後、日田市内を豪雨が襲い、日田市は天ヶ瀬温泉旅館街や中津江地区等で水害が起こりました。日田市社会福祉協議会と被害状況を鑑み、家屋の泥出しボランティアの必要性があることから、被災件数の多かった天ヶ瀬旅館街のある旧天ヶ瀬公民館を拠点に日田市災害ボランティアセンターを立ち上げました。

コロナ禍もあり、県外からのボランティア受け入れができないため、ボランティア不足になるかと思いましたが、ボランティアセンター開設初日に県内から２００名を超えるボランティアが駆けつけてくれ、とても有り難かったです。

新しい支援のカタチ

コロナ禍のため、県外からのボランティアを受け入れることができず、「県外にいるから何かしたい」「いけない旅費の分を物資に変えて送りたい」「何が必要？」など、多くのご支援の声をいただきました。

物資を受け入れる準備を進めていましたが、これまでの災害でもSNS等で「タオルください」と告知すると大量の物資が届き、SNSも拡散し続けるため、物資の受け入れを止めることができないなどの課題もありました。

今回「必要なひとに必要な支援を、必要な分だけ」をコンセプトにしている「スマートサプライ」というシステムを導入して、アマゾンの欲しいものリストを公開し、送風機や高圧洗浄機などの泥出しに必要な物資を支援者に購入いただき、現地に送ってもらう方法を取りました。そのため過剰に物資が届くこともなく、必要なニーズを伝えることができ、また県外の方の支援を多く受け入れることができました。

※「スマートサプライ」
一般社団法人 Smart Supply Vision が開発した「必要な人に、必要な支援を、必要な分だけ」を気軽に、双方向で実現できるインターネット上のプラットフォームシステム。

～必要な人に、必要な支援を、必要な分だけ～

日田市では昭和28年に大水害があり、天ヶ瀬温泉街でも玖珠川でたびたび越水などによる水害が起きてはいたものの、住民さん曰く「昭和28年以来、2番目に大きな災害だった」とのことでした。

そのため、災害後は「もう修理しても、また災害が起こるかもしれないので住むのは難しいかも」との声もありました。玖珠川流域の河川工事がどのようになされるかで、住み続けられるかどうかも変わってくると思います。

少しずつ前へ

多くのボランティアの皆様に駆けつけていただき、被災家屋や旅館などの泥出しは収束しました。被災した旅館は、コロナ不況も相まって廃業をするところもあります。再建に向けて動きつつもありますが、まだまだ修理に時間がかかります。

旅館街の中に川に面した露天風呂の川湯があり、その泉源やポンプも被災しました。川湯の泉源に入った泥出しをボランティアが行い、温かいお湯がまた出てきたりと、嬉しいニュースもありました。

今後の天瀬のために

被災された方は今後、自宅を立て直すか移転するかなど再建方法を検討していきます。天瀬地区に戻られる方、戻らない方など再建は多様ですが、水害も多い天瀬を住み続けられる地域にするためにも、市民の防災意識を高め、早めの避難を心がけていく必要があります。

これからも、災害支援は続きますが、同時に防災意識を高めていくお手伝いもしていきたいと思っています。

WEB

Facebook

NPO法人 リエラ 代表理事 松永（まつなが） 鎌矢（けんや）さん

大分県中津市の出身。2011年、大分大学在学時に東日本大震災が起こり、宮城県七ヶ浜町に災害ボランティアに半年間いったことをきっかけに、卒業と同時に愛知県名古屋市に拠点のある災害支援を行うNPOに入職。主に国内の災害対応などを行なう。

2017年の九州北部豪雨で日田市が被災したことをきっかけに、NPO を退職し日田市地域おこし協力隊となり、災害支援に取り組む。また、災害支援を続ける中で、2019年4月に「NPO 法人リエラ」を立ち上げ、7月豪雨発生後も日田市天ヶ瀬地区に拠点を構え災害支援に取り組んでいる。

令和２年７月豪雨で活躍した
次世代 Vol.2

NPO法人　球磨川（くまがわ）アドベンチャーズやつしろ

熊本県（くまもと）八代市（やつしろ）

すぐさま救助活動を開始

７月４日未明から八代市でも凄い雨が降っていました。ＳＮＳ等で球磨川が「危険な状態」という情報も得ていました。今後、地域で何か発生したらすぐに復旧活動が出来るようにと、ゴムボートや、ライフジャケットなどの準備をし、次の日、川に一番近いメンバーの家に午前７時３０分に集合しました。

まずは人吉に向かおうとしましたが、浸水で進めず、芦北のルートへの変更も考えましたがこちらも浸水で移動が出来ません。

そんな中、メンバーの一人に「ライフジャケットを坂本で貸してほしい」という連絡があり、リスク管理の勉強をしてきたこともあり、「ひとりでは動かない」という前提の中で、ダッキーとライフジャケットを持って、坂本への移動を開始しました。

移動途中、道路が倒木等で、寸断されていた為、目的地から８ｋｍ離れた地点から歩いて現地へ向かう事にしました。運よく途中で車に乗せてもらう事ができ、消防の方々よりも早く現地へ到着。午前１２時頃から救出作業を開始しました。

現地では家の２階まで浸水していました。ＳＮＳ上で「助けて」と発信されているのを見つけて助けに行きました。また、当会の村上代表より、「水と食べ物を運んできて欲しい」という依頼もありましたので、水とパンを現地の人に配りながら歩いてライフジャケットを運びました。

ダッキーを使って３０名の方を安全な堤防まで運びました。中には、ペットをリュックに入れているなど、パニックになっている方もいらっしゃいました。最後の一人は、ご高齢の方で、２階から介助しながら無事に救助することができました。救助され、家から出ることができた方からは非常に喜んでもらえました。

救助が終わると、復旧活動へ

八代市が食料支援を体育館で行っていたので、「届けたい」と交渉し３００～４００食を、譲り受けました。知人の中に、坂本に知り合いがいました。そういった方々と通行できる道路の情報共有が出来ていたので、二見経由で大きく迂回して坂本まで入り、その先は水やパンや食べ物を抱えるだけ抱え、道なき道を何キロも歩きました。また、市が保管している水を水道局まで運ぶお手伝いもしました。

現地に入って気づいたのですが、混乱した状況下では、市役所も孤立している地区を完全には把握出来ていませんでした。市役所に報告すると、自衛隊が動いてくれました。メンバーに知り合いがいなければ、坂本にいくきっかけは無かったと思います。

やはり「人」なんだと思いました。

当初は、西部の集会所を管理している住民に許可をもらって拠点にし、清掃・仮眠して過ごしました。

坂本に支援拠点を開設

坂本での活動を始めて、物資庫・支援物資を集める拠点が必要になりました。そこで、八代市に交渉した結果、町内にある「田上社会教育センター」を拠点施設として借用できる事となりました。

村上代表は、熊本地震の際から支援活動を行っていたので、その繋がりにも支えられました。以後、全国各地より支援物資を募る事ができました。結果的に延べ１０００人以上の方に物資の支援を行う事ができました。支援のニーズも当初は食料が中心でしたが、時を追うにつれ、家電などの生活必需品に変わっていきました。

今回の経験を次の世代につなげたい

今回の経験を経て、災害が発生した時に、どのように順を追って動いて行けばよいかが分かるようになりました。水が大事であること、最初の１週間を生き延びるためにどうしたら良いか、常に１００％のクオリティは出来なくて良い、８０％でいい、といったものです。今回の経験を次の世代につなげていきたいです。

神戸大学の学生を研修で受け入れて、今回の体験を話しながら現地の人とも触れ合って頂くように考えています。

また、河川の中に流木等、様々なものが堆積しているので、どのように引き出すかを考えています。活動を開始して１００日が経過し、７月７日から１日も休まずに活動してきて、最近になってようやく子どもたちと過ごす時間が出来てきました。

被災地の皆さんが元気になってきている事で、逆に元気をもらっています。災害復旧を機会にＳＵＰや登山等のイベントへの参加者も増えました。

大切なのは「人」だと思います。災害復旧で中に入って思うのは、ポイントとなる人が多い程、復旧が早いという事です。川の活動をしていて、川の仲間達が頑張っている。楽しかったからまた遊びに来たい。大人はそれを見守ってあげる事ができればよいと思います。

ＮＰＯ法人 球磨川アドベンチャーズやつしろ

橋本（はしもと） 修（おさむ）さん

Facebook

イチゴ農家で４児のパパ。農業関係の役員をしていることもあり、川の魅力を若い世代に伝え人と川を繋ぐ活動を行っています。

春はスケッチ大会、夏はカヌー体験、秋は沢登り、冬はゴミ拾いなど一年を通して子どもたちを川で遊ばせ、球磨川の良さを伝え、川に近づきたくなるような環境づくりに取り組んでいます。

NPO法人（おおよどがわりゅういきれんけい） 大淀川流域ネットワーク
池辺（いけべ） 美紀（よしのり）

笹尾川水辺の楽校運営協議会（ささおがわみずべのらくこううんえいきょうぎかい）
浦濱（うらはま） 恵介（けいすけ）

令和２年７月豪雨で活躍した 次世代 Vol.3

NPO法人（せんだいがわりゅういきれんけい） 川内川流域連携ネットワーク
春園（はるぞの） 四郎（しろう）

かせがわかいはつけんきゅうかい
加勢川開発研究会
田中（たなか） 洋丞（ようすけ）

九州河川協力団体連絡会議「防災・災害支援チーム」が誕生！

九州河川協力団体連絡会議の「防災・災害支援チーム」が令和２年１０月１日に発足しました。その背景には、近年、全国で毎年のように頻発している「記録的豪雨」があります。数十年に一度の降水量や、想定を超える豪雨による河川氾濫などの大規模災害、なかには激甚災害認定に至るケースも発生しています。

特に九州は、歴史的に見ても、台風や梅雨時期等の豪雨災害が多い地域であり、令和２年７月豪雨では、鹿児島・熊本・大分・福岡と広範囲にわたり被害が報告され、激甚災害に指定されるに至りました。

一方、九州圏域では平成２５年に河川協力団体が組織化され「九州河川協力団体連絡会議」として精力的に活動しています。そして、河川の利活用や、啓発イベントにおいて、「九州はひとつ」の合言葉のもと、素晴らしい協力体制を構築する事ができています。

しかしながら、河川氾濫などの災害に対する復旧・復興支援に関しては、これまで地元団体の活動や、善意による物資応援など、個々のボランティア精神に頼っているのが現状でした。

ONLINEを活用して協議を重ねました

そのような背景を受け、豪雨による河川起因の大規模災害時の支援や防災意識の向上を図るべく「防災・災害支援チーム」が誕生。次世代を担うメンバーから４名の担当役員が指名されました。結成後、オンラインミーティングツールＺｏｏｍによる役員会議を数回重ね、活動目的や具体的な支援範囲等について協議しました。活動目的は「防災意識の向上と河川起因の激甚災害相当レベルの被災地支援。」に定めました。

被災地支援を行う際の事業実施のスキームは、大規模災害発生後、「九州河川協力団体連絡会議有志」で災害支援を行う旨を「防災・災害支援責任者」に報告。それを受けて責任者が「九州河川協力団体連絡会議」の代表・副代表に立ち上げの打診を行い、承認を受けた後、組織立ち上げを指示。「災害支援チーム連合体」を２団体以上で結成し、その後、活動開始となるものです。

「災害支援チーム」は現地での災害ボランティアと、ボランティア活動に必要な支援物資の確保、他団体へ被災地での必要物資の支援連絡、そして被災地の状況をＳＮＳ等で情報発信します。

並行して、九州河川協力団体連絡会議や、国土交通省九州地方整備局にも情報提供を行うことと定めました。

「防災・災害支援チーム」では、早速、７月豪雨の惨状を受け「九州河川協力団体連絡会議役員会」において、豪雨発生時まで遡って災害支援金の支出を認めてもらい、現地で災害支援活動を重ねてきた３団体に対して、備品や消耗品などの実費相当の支援を行いました。

今後の活動について

今後の九州河川協力団体連絡会議活動として、激化する水害に対して、「水防災意識社会の再構築」の取り組みや「流域治水」の取り組みについて、各流域において河川管理者と連携して、住民の皆様への啓発活動のお手伝いや自助を助ける共助の役割を担えるように、チームとして日常的な取り組みを積極的に実施していきたいと考えています。

全国に先駆けて組織された「防災・災害支援チーム」。この九州モデルが、備えとして全国に波及し、もしもの場合の住民の安心につながることを願っています。

流域を越えた物資支援活動など九州河川協力団体同士での連携が見られた１年でした。

九州河川協力団体連絡会議

Facebook

河川の管理を通じて、豊かで活力ある地域社会の実現に向けて、九州管内各流域における河川協力団体が、河川管理に関して、情報の共有、発信及び提言を行うことを目的としています。

特集

川の先駆者

九州各地で河川に関わる様々な活動が盛んに行われています。

河川清掃等の美化活動、水質や生物多様性等の環境保全、水防災意識の啓蒙や災害復旧支援、観光など河川を活かした地域振興、子ども達の学習支援等、活動の内容も様々です。そして、それらの活動には、長年にわたってけん引してきた先駆者がいます。

今回はそんなパイオニアたちの活動遍歴や思い等を、紐解いていきたいと思います。

NPO法人 筑後川流域連携倶楽部（ちくごがわりゅういきれんけいくらぶ）

理事長

駄田井（だたい）正（ただし）さん

福岡県久留米市（ふくおかくるめ）

ため池で遊んだ幼少期

私は大阪府南部の南河内郡（現在は堺市に編入）の田舎町出身です。自然豊かな環境、敬語を使わない、のどかな文化の中で育ちました。瀬戸内気候で雨が少ないため、地域内にはため池が点在しており、子ども達はそこで遊泳をしていました。

創造するから「遊び」

野原遊びも好きでした。私は「遊び」とは、自分達で創造する事だと考えます。野球をする際は、貴重なボールを紛失しない様にファウル2本で1アウトにする等、友達と協議して、自分達のルールを創りました。昨今では、正規のルールに基づき、専用の施設で規定の道具を使う「スポーツ」としての野球が人気ですが、「遊び」で野球をする子は減っている気がします。子どもの頃に自由な遊びを通して、創造性を育む事も大切なのではないでしょうか。

恵みに感謝し、緩やかな連携で豊かな流域を育む筑後川流域連携推進事業が、水循環の健全化に貢献したと評価され「第１８回日本水大賞」を受賞しました。

筑後川とのご縁

大阪の大学で経済学の博士号を取得した後、知人の紹介で福岡県の久留米大学に赴任しました。全く無縁の地でしたが、故郷と似た点も多く、暮らしやすい場所だと感じました。

当時は、戦後の高度経済成長期の真っ只中。コンピューターを用いた研究が始まる等、経済学部は時代の「華」でした。その中で私は、「理論経済学」を研究、指導していました。

しかし、理論と現実の乖離を感じる場面も多く、非現実的な学問に行き詰りを感じた為、より現場主義的な実践的研究に舵を切る事にしました。

流域圏で考える時代に

１９８９年発表の、「全国総合開発計画」に、流域圏を考える視点が盛り込まれると、大学で筑後川流域を研究するプロジェクトが始動しました。その中心を担う、久留米大学産業経済研究所（現経済社会研究所）の所長に就任した事を契機に、私と筑後川流域の関係が誕生しました。

プロジェクトでは、地域の研究者や筑後川工事事務所の方等、様々な分野で流域に関わる人物を紹介する公開研究会を隔月で開催しました。毎回、終了後には懇親会を設け、参加者達と夜通しで議論を交わし合いました。その中で、多様な資源があり、水循環が完結する流域の魅力に心酔し、その輪をつなげていきたいという思いが強くなりました。そして、その交流から生まれた、新しいネットワークがもとになり、『ＮＰＯ法人筑後川流域連携倶楽部』が誕生しました。筑後川で遊び、筑後川で学び、川を核とした地域振興の実現や、環境面、防災面での取組を流域全体で進めてきました。

筑後川新聞で流域情報を共有

筑後川は四県にまたがる大河であるため、地域ごとに購読される新聞が分かれています。

そこで、流域間の情報共有を目的に１９９９年に筑後川新聞を刊行しました。以降、隔月で発行を続けており、令和３年４月で１３０号を数えます。上流域に水源環境の保全活動が誕生したり、流域観光等のきっかけが生まれたりと一定の効果を流域にもたらすことができました。

筑後川フェスティバル

流域の合意形成のシンボルとして、筑後川フェスティバルを各地との連携で開催しています。元々は、大川の青年会議所の若者たちが、地域おこしとして始めたお祭りですが、時代と共に地域おこしから環境、さらに防災にとテーマが変わりながら、現在も続いています。今後は若い世代の参画も呼びかけ、時代に沿った意義のある取組を継承していきたいと思います。

流域はテーマパーク

筑後川をひとつのテーマパークに見立てた「筑後川まるごとリバーパーク構想」では、着地型の観光を長年模索しています。数日かけて筑後川流域を巡って頂き、各地で地元の人たちと交流や対話を楽しんで頂けるよう「川の駅」の設置や、モデルツアーの検討などを地方自治体、企業の協力を得て行っています。

筑後川流域のブランド化

筑後川流域には、多種多様な資源があります。地域そのものをブランド化して、筑後川流域は素晴らしい、そこにある産品や、人物も素晴らしい、という事をアピールしていきたいです。この事業は、久留米大学の学生にも携わって頂いています。講義を聞くだけでなく、実際に深く携わる事によって知識が深まる事を期待しています。

判断基準は面白いかどうか？

人生は一回。これからの時代は、「遊び心」が大事だと思います。遊ぶのは人間の特権。ロボットやＡＩは遊べません。何かに取り組む際に、大切にしているのは面白いか、面白くないか。もしも、やらないといけない事があれば、いかに面白くするか。執着しないで面白くやることが肝心だと思います。これからも、経験体験＋直観に基づくアイデアで、地域の魅力を人々に伝えていきたいですね。

笹尾川水辺の楽校（ささおがわみずべ）運営協議会

会長

松尾（まつお）一四（かずし）さん

福岡県北九州市（ふくおか さたきゅうしゅう）

活動領域や関心分野がどんどん拡大

幼少の頃は笹尾川でよく遊んでいました。当時は炭鉱の選炭事業で水が汚れていましたが、水泳や魚釣りを楽しんでいました。その後、平成14年、笹尾川水辺の楽校の開校と同時に参加をしました。水辺へ如何に子どもを呼ぶかをテーマに、親水活動を模索する中で、活動範囲も笹尾川での活動から、遠賀川流域全体へと広がり、活動の内容も河川環境活動から河川防災へと広がっていきました。

世代別に対象をわけて活動を展開

私たちは、世代別に対象を分けて事業を行っています。幼稚園児にはサケ稚魚の放流大会、小学生を対象にした「水辺で遊ぼう！」では、カヌー体験を中心に、水生生物調査、水質試験、「みずしるべ」の調査をしています。中学生・高校生世代との活動は、橋脚壁画の制作を香月中学校美術部の生徒さんと一緒に行ったり、くすばし少年消防クラブの皆様にカヌー指導者講習会を実施しています。そのほか、水位目安表示や、水辺で交流を深める「ナイトリバー」や、当会一五周年記念誌の製作などを、行っています。

遠賀川は、サケが遡上する日本最南端の河川です。毎年「戻ってきますように」との願いを込めて、幼稚園児とサケの稚魚を放流しています。

毎年、北九州市立香月中学校の美術部の皆さんと制作している「笹尾川楠橋の橋脚壁画」。

この中で、皆様にご紹介したいのが「笹尾川水辺で遊ぼう！」です。カヌー体験教室をメインに、水質調査や生きもの調べを行っています。当時、近隣の小学校から児童に対して、水辺は危険だから近寄らないようにとの通達が出ていました。そのような中でも川に親しんでもらいたい思いで開催しました。

実施にさきがけてカヌー体験を行うために、親子参加型の「手づくりカヌー教室」を開催し、2年にわたって2艇を製作しました。その経験を経て、カヌー指導者講習会を実施し、カヌー体験の運営に当たりました。

様々な困難を、「繋がりの力」と、「アイデア」で克服

「手づくりカヌー教室」を実施するに当たり、設計図書の購入費や樹脂やガラス繊維の材料費の捻出、製作会場の選定など、様々な苦労がありました。

まず、設計図書の購入については、当時所属していた、姉妹団体である香月千代スポーツクラブから資金面での協力を得ました。樹脂やガラス繊維の材料費は、社会人時代の共同研究先から無償で提供頂く事ができました。製作会場は、たまたま、会場近くの建設会社の経営者との交流があり、作業場の提供を頂きました。この事業のスタッフは、開校当時から関わった皆さんがカヌーの乗船指導を行い、若いくすばし少年消防クラブの隊員が乗船補助・船上監視を実施しています。

地域の方から愛されるイベントに

回を重ねるごとに人気が出ており近年では、募集開始直後に定員が埋まってしまう状況です。主に、近郊の南部6校の児童が参加をしてくれていますが、6校以外や市外からの参加もわずかにあります。また、アンケート結果によると、大多数の親子が、カヌーに興味を持っていることがわかっています。

夢はさらなる活動の広がり

今年度、遠賀川流域の各団体で協働して取り組んでいる「遠賀川流域フェスタ　ナイトリバーin○○」を、点から線に、そして面への取り組みに拡大したいです。二点目は、姉妹団体の「ふるさとまちづくりの会」のコスモス鑑賞会に併せ、「香月黒川ほたる館」「笹尾川水辺の楽校」、「寿命の唐戸」のフットパス・スタンプラリーを実施したいです。

最後に中高生を対象に、笹尾川から本流遠賀川へと、カヌーによるリバーパスを実施し、活動範囲の拡大と内容の充実を図りたいですね。

NPO法人
都城大淀川サミット
みやこのじょうおおよどがわ
前理事長
松下 信芳 さん
まつした　のぶよし

宮崎県都城市
みやざき　みやこのじょう

都城大淀川サミットの誕生と発展に尽力

大淀川上流域の「お父さん」的存在

昭和4年6月6日宮崎県都城市山田町生まれの91歳です。私は小さい頃から川が好きで、川遊び・魚捕りに明け暮れた幼少期を過ごしました。

平成2年3月に、当時の郵政省都城郵便局を定年後、地元・都城市の地区公民館長等を歴任しました。この間、都城市社会福祉協議会連協長就任、「NPO法人大淀川流域ネットワーク」代表副理事などの役職を通じ、大淀川の環境問題や保全活動に従事して来ました。

平成22年、当時の大淀川水系に位置する16の市町村が、順番で行政主催の「大淀川環境大学」を実施していました。この講座に参加していた私を中心とした、有志の皆さんが「この活動は続けなくては」と発起人となり、同年11月1日に「都城大淀川サミット」を創設致しました。

活動の中で苦労した事は、発足当初の資金調達でした。大淀川サミット発足時は資金源が無く、「完全なボランティア」で活動をしていました。

「大淀川サミット」の様子

イベント会場も無料の所を探し頼み込んで借用し実施していました。現在ではNPO法人の認可や、国土交通省より河川協力団体の認証を頂き知名度も上がって来ましたので、行政・企業の助成金等のご支援を戴く事ができ、活動出来ております。

都城大淀川サミットの活動で、特にご紹介したい取り組みが「大淀川こどもサミット」です。ある会員さんのアイディアで、平成23年8月に第一回を開催しました。次の世代を担う子どもたちに、川遊びの楽しさ・恐ろしさ・大切さを教えています。

子どもサミットに参加をした子どもたちが将来、川の環境を守ってくれるようになる「きっかけ作り」と

魚のつかみ取りは子どもたちに大人気！都城市内の公園に整備された水路で開催するので、小さな子どもも参加をする事ができます。

子どもサミットでは、大淀川の魅力を「食」で伝えようと、地元名産の鮎を会員特製の焼き場でこんがりと塩焼きにして提供しています。

し、大きな期待が掛かるイベントの一つです。

退任後も、「想い」は熱く

おかげ様で近年は、大淀川上流域の中心的団体として、国土交通省・宮崎県・都城市役所・曽於市三股町・協賛団体・市民の取りまとめ役に認知される様になりましたので、平成31年3月16日「創立10周年記念行事」開催後、翌年4月をもって、理事長職を退任致しました。

現在は顧問として、会の行く末を見守っています。退任に当たり、昨年10月には会員さんを始めとした関係者の皆様に「慰労会」を開催して頂き、頑張って来た集大成となりました。

今後は、九州内の川を愛する仲間との連携で、川遊びの情報共有を進め、共に楽しみ、困り事・災害時は、元々繋がりのある「河川協力団体」同士で、遠慮のない要望！本当に的を射た「今！必要な情報」を発信・受信出来る有利さで、助け合いの心を持ち、協力し合える団体になれたらと思っています。

姶良川河川愛護会　第４代目会長
小浜（おばま）

昭二（しょうじ）さん

鹿児島県鹿屋市（かごしまけんかのやし）

「姶良川」との関わりについて教えてください

幼少期より、親父たちについていき　ハヤ釣りやウナギ釣りなどに興じていました。その後、１９７６年に稚鮎の放流活動を行う「アユ同好会」を１００名で発足し、仲間たちと活動していましたが、「放流して捕まえて食べるだけでは虚しい、この川を守っていくために、何かをやろう」と思い立ち、１９７９年に会の名称を「姶良川河川愛護会」と改め、河川愛護意識を啓発する活動を始めました。多くの方が趣旨に賛同をしてくださり、設立時の新規会員は２００名を越えました。現在も１５０名が参加をしています。

１９８８年より開催している「姶良川クリーン作戦」。毎回多くの方々にご参加いただいてます。

４０年以上　河川愛護に携わる

姶良川河川愛護会では、それまでも行ってきた稚鮎の放流（４５年間継続中）の他、姶良川クリーン作戦や、（１９９８年より２３回開催）河川愛護のためのポスターと作文コンクール（２００３年より、町内全小学生が応募）といった活動を長年継続して実施しています。また、鯉釣り大会や鯉つかみ取り大会（コイヘルペスの蔓延で現在は休止中）、川に関する講演会等も開催しました。

講演会は過去８回開催し、故C・W・ニコル氏や、故福留脩文氏といった、著名人にもご登壇頂きました。一方、啓発活動だけでなく、会員の知識の研鑽を目的として、会員による全国有名河川の研修旅行として四万十川、大畑川、球磨川等を訪れました。

自分達の川は、自分達で守ろう

１９８８年より開催している「姶良川クリーン作戦」です。昔から川は多くの恵みをもたらしてくれると同時に、排水溝の役割も果たしていました。特に年配の世代は日常生活から出るゴミを躊躇なく川に捨てていた時代でした。犬猫の死骸や、たまには子豚の死骸までも。産業が発展してくると、自転車や家電製品までもが投げ捨てられていました。そこで愛護会が提案して「自分たちの川は自分たちで守ろう」をスローガンに、年に一回集中して清掃を行う「クリーン作戦」を始めました。

当初は少しでも多くの町民に参加してもらおうと、広報に気を配り５００名前後の参加者が訪れました。毎年続けるうちに当時の建設省からも参加賞などのタオルなど頂いたものです。

現在では、このクリーン作戦の広報には、ほとんど気配りは必要なく、チラシ1枚ぐらいで３００名程の町民がつねに参加してくださいます。微々たる活動ですが**「継続は力なり」**を実感しています。

子ども達が　川で遊べる環境を

会員の中でも、とくに役員の方々は根っから川好きが多いので、イベントを企画するときなど困難を感じることはほとんどありませんよ。ただ、全国的な傾向、課題なのかもしれませんが、一つ気になることは次世代を担う若者たちが少ないことです。

しかし、微々たるクリーン作戦ではありますが長年続けていれば、小中学生のなかに「ヤングボランティア」なるものなど出来てきて色々なイベントに参加してくれています。最近の参加者に家族連れが何組も参加してくださるのはとてもうれしいものです。

私個人の独断と偏見で3つの提案をさせてください。まず、春の水ぬるむ頃に、「足を川の水につけてみたい」と思えるようなきれいな水質作りを、自治体の皆様にご努力頂きたいです。次に、国土交通省の皆様には、堤防から水辺にスーッと近づきやすい工法で河川の整備をして頂きたい。

最後に、文部科学省の方々には、幼稚園、小学校、中学校の子どもたちに、川遊びの楽しさを沢山教えてあげる教育を取り入れてほしいです！川遊びは危ない、危険などの情報も大切な事ですが、危険情報より楽しい情報をまず教えていきたい！その為には学校教育者の理解を深める研修等も大切だと感じます。

みんなに伝えたい、場所・味がある！

発地信域

流域じまん コーナー

ふるさとの川には、みんなに自慢したくなる魅力がいっぱい！

このコーナーでは、河川を愛し、河川を知り尽くした皆さんに、「流域じまん」を尋ねてみました。流域の歴史、景勝地、味覚、活動、人、産品等々、長い暮らしの中で育まれてきた地域の宝を再発見してみませんか？

幻の高来そば

地域で受け継がれた「在来種」のそば

長崎県下唯一の一級河川「本明川（ほんみょうがわ）」が流れる諫早市では、そば栽培を活かした地域おこしが注目されています。

その名も「幻の高来そば」。同市高来町金崎地区の限られた農家で脈々と伝承されてきた、幻の在来種です。その起源は定かではありませんが、古くから本明川流域では、多くの農家が自家用にそばを栽培し、年の暮れには地元の人々が集まってそばを打ち、ご近所等に振舞う風習がありました。

長崎県諫早市高来町（ながさき いさはや たかき）

「幻の高来そば振興協議会」が誕生

在来種のそばが日の目を浴びたのは、平成２０年代に入っての事です。

高来町で諫早市長を招いた座談会が開かれた際に、金崎地区の数軒の農家で代々栽培しているそばが話題となりました。実際にそばを打ち試食も行ったところ、市長をはじめ多くの出席者がその風味に感動。「こんなに良いそばがあるなら、地域おこしに使えないか」という話になり、平成２２年に地元農家や、そば好きが集まり「幻の高来そば振興協議会」が誕生し、生産農家から、数少ない貴重な種子４８キロを譲り受け、地域の休耕田等で栽培を始めました。

幻の高来そばの栽培がスタート

千陸地（かんりくち）での試験栽培

本明川は、諫早市五家原岳に源を発し、諫早市と雲仙市の支流から水を集め、有明海の諫早湾に注ぐ河川です。諫早湾干拓事業で干陸地が生まれると、その全長が７キロメートル延びました。

この新しい河川敷では、同協議会が中心となり「都市・地域再生等利用区域」の制度を活用した幻の高来そば栽培の実証実験が行われています。また、隣接する高来町深海地区では河川協力団体の拓生会がコスモスを植栽しており、１０月中旬頃の開花時期に開かれ、２万人が訪れる「３００万本のコスモス祭り」でも幻の高来そばを提供しています。

－そばの花－

幻の味を「どろりそば」で堪能

高来そばの種子は、一般的な品種よりもサイズが小粒で成分が凝縮している為、味の濃さや、粘りの強さが特徴的です。そばを打つと、香りが高く、コシの強いそばが打ち上がります。

また、食べ方にも特徴があります。茹で上がった麺と、茹で湯をお椀に入れ、少量の醤油を回しかけて頂く「どろりそば」は年末等で多くの人が集まる中で、素早くそばを提供するために生まれたこの地域ならではのスタイルです。

ますます拡大していきたい

協議会は、幻の高来そばによる地域おこしをさらに進めたいと話しています。本明川のボートコースで行われたボート日本代表合宿では、選手達に幻の高来そばを提供し、好評を得ました。干陸地を利用した「いさはや水辺のクロスカントリーコース」では駅伝大会などが開催されます。このようなイベント・コスモスなどとコラボし、地域興しができればと考えています。

また、現在は諫早市内に幻の高来そばを提供できる店舗が数軒しか無いため、店舗を増やし「幻の高来そば巡り」ツアーなどもできればと考えています。

Information

「幻の高来そば」をご自宅で！

下記のQRコードから通信販売で「幻の高来そば」のご注文ができます。ぜひ味わってみてくださいね！

幻の高来そば振興協議会

〒859-0112　諫早市高来町小船津 363-5
「轟街道ふれあい市」内
TEL(0957)27-7500　FAX(0957)27-7501
http://www.maboroshi-soba.com
山口徳男（会長）、森和幸（事務局長）

通販ショップQRコード

流域じまん 地域発信

初代筑後国主

「田中吉政公」と水郷「柳川」

福岡県柳川市（くまもと やながわ）

新型コロナウイルスが拡大する以前は、年間で２０万人以上の外国人旅行者が訪れていた「水郷柳川」。人々の心を打つ掘割の情景の礎を築いたのが、初代筑後国主である田中吉政公です。吉政公は、戦国時代から江戸時代初期にかけて活躍した武将です。豊臣家、徳川家に仕え、筑後柳川（現福岡家柳川市）に近江八幡（現滋賀県近江八幡市）や三河岡崎（現愛知県岡崎市）といった各地で治水対策や城下町の整備を行い、数多くの功績を残しました。

特に「堀」や「水路」「街道」といったインフラ整備と、地域振興とを掛け合わせる名手で、琵琶湖からの水を近江八幡に繋いだ「八幡堀」は、後の近江商人の発展を支えました。また、岡崎城とその城下町を囲む「田中堀」そして「岡崎二七曲がり」は、八丁味噌や西尾茶といった地域を代表する地場産品を生み出しました。

湿地にそびえた五層の天守閣

吉政公が柳川城に入城したのは１６０１年（慶長６年）の事。関ヶ原の戦いで西軍の中心人物である石田三成を捕縛した功績で筑後国３２万石の国主を任されました。吉政公はまず低湿地帯にあった柳川城を整備。８mの石垣、五層の天守閣を築きました。その高さ３６m。姫路城（３１・５m）や熊本城（３１m）といった名城よりも高い天守閣を湿地帯に築く事が出来たのも、全国各地で大規模な土木事業に携わってきた経験がなせる業です。残念ながら天守閣は明治５年に焼失してしまいましたが、今でも石垣の一部が残っています。

日本一の掘割を整備

柳川城と併せて城下や領内の整備にも着手しました。もともと柳川には、２２００年前より人々が住み始めたとされており、太古の昔より、湿地帯での暮らしを守るために、点々と掘が築かれていました。吉政公はその資源を活かし、総延長約９３０mにもわたる掘割の水利体系を整えました。また、掘割を掘る事で出来た土は、家屋を建てる際の盛土や堤防として利用されました。こうして、湿地だった柳川の地に、人々がくらしやすい環境が整えられていきました。

さらに、有明海沿岸に慶長本土居を築き、干拓による有明海沿岸の新田開発を奨励し、稲作を拡大したほか、筑後川、矢部川の治水工事や、八女の和紙産業の創出を行い、筑後国は飛躍的な発展を遂げました。また、領内十カ所に支城を配置し、城を結ぶ軍事交通路を整備しました。その一つである「久留米柳川往還」は、現在県道２３号線（久留米柳川線）に形を変え、今なお私たちの暮らしを支えてくれています。

一度、姿を消しそうになった事も

生活用水としての機能はなくなりましたが、今なお、掘割は田畑への農業用水を供給する水資源として、また、地域の観光資源として活躍し、郷土のシンボルとなっています。しかし、実は昭和中期に埋め立てる計画が持ち上がったのです。

昭和３０年代に、柳川市の水利用に大きな転機が訪れました。それは、上水道の敷設です。水道が引かれる以前は、掘割の水が生活用水として利用されており、水源である掘割は地域によって丁寧に管理されていました。しかし、水道が通った後は、掘割に下水や家庭の廃棄物、農薬等が流入するようになり、さらに治水対策によって水量が少なくなった事で、掘割の水は一気に富栄養化した水になります。上水としての役割を終えた掘割をついには埋立てる計画が持ち上がります。これは柳川市だけに限ったことではなく、高度経済成長期真っ只中の日本各地で、小さな河川や堀が埋め立てられたり、フタをされたりしていました。

しかし、このことに強い危機感を覚えたのが当時柳川市職員であった広松伝氏です。広松氏は、掘割が埋めたてられることで、近隣の排水機能が失われ、地盤沈下が発生する可能性を指摘。当時の市長の理解を得て、身を粉にして関係者の合意を形成し、河川浄化計画を立案しました。計画に基づき、浚渫による流水の復元、市民参加型の清掃活動の実施、排水規制や浄化施設の増築による汚水流入の削減といった取組を行うことで、掘割の浄化が進み、さらには住民の掘割への視線が大きくかわりました。そうして、掘割はその姿を守られたのです。

その後、柳川市には「水の会」が誕生し、今なおその精神や取組を受け継いでいます。例年１０月の空気が澄み、月が美しく輝く時期には「観月船」の行事が開催されています。掘割に「どんこ舟」と呼ばれる川下り用の舟をうかべ、夕暮れ時に開会。地元の味覚に舌鼓を打ち、演芸やコンサートを楽しむうちに、空の暗さが深くなり、いよいよ月が顔を出します。そうすると、掘割の水面にも月が現れ、参加者は「２つの月」を交互に眺め楽しみながら川下りを満喫するのです。

寄稿：川嶋睦己さん

掘割に浮かんだ「どんこ舟」と呼ばれる川下り用の舟に乗船し、夕暮れ時に開会します。

流域じまん 地域発信

大淀川学習館

60万の暮らしを潤す 流域面積第2位の大河

大淀川は、3県3市5町にまたがる九州でも有数の一級河川です。流域の面積は九州で2番目、本川の長さは4番目となっています。

鹿児島県曽於市末吉町にある中岳の中腹が源流で、その後、都城市を経て山地に入り、多くの支川を集め、宮崎平野を大きく曲がりくねりながら107kmという長い旅をして日向灘に注いでいます。

この流域内に、約60万人の住民が生活していて、川から様々な恵みを受けながら川を利用しています。

今回は、そんな大淀川の自慢できる施設『大淀川学習館』をご紹介します。

大淀川への愛護意識や 郷土愛を育む場

大淀川学習館は、宮崎市制70周年の記念事業として、大淀川浄化活動や大淀川学習のシンボル的な施設として平成7年3月に開館しました。大淀川学習館では、明日を担う子どもたちに、大淀川の自然はもとより、水資源を大切にする心や郷土を愛する心を培うとともに、自然体験のできる学習の場を提供していて、大淀川の恵まれた自然を広く学習・体験できるように展示が工夫されている自然観察・自然体験や環境教育の拠点施設です。

大淀川に面する屋外フィールドには「大淀川水辺の楽校」という、もとの自然を極力残して整備された市民緑地があります。また、反対の山側には「里山の楽校」があり、遊歩道を散策しながら自然を満喫することができます。

みやざき　みやざき
宮崎県宮崎市

接する大淀川水辺の楽校。子どもでも水辺で安全に自然体験をすることができます。全国規模で調査される「川の通信簿」においても、優良な水辺である評価を受けています。

大淀川学習館の館内。大型水槽の中には、大淀川に生息する淡水魚などが展示されています。

川の名を冠した「オオヨドシマドジョウ」。南九州の大自然で独自の進化を遂げた、大淀川にのみ生息する固有種です。

館内の様子

自然学習園・チョウの部屋は、天候に左右されずに自然観察が可能な学習スペース。

長距離を移動する蝶として有名な「アサギマダラ」も観察する事ができます。

「ホタル展示室（ホタルのへや）」

3Dハイビジョンで上映される「川のシアター」

体験から生まれる学びを大切にしています

大館内には、大淀川の自然に関するオリジナル番組が3Dハイビジョンで上映される「川のシアター」、大淀川に生息するまぼろしの魚アカメやオオヨドシマドジョウなど、大淀川の代表的な魚を展示している「生体展示ホール（サカナのへや）」、大淀川流域に生息するアゲハチョウやタテハモドキなどチョウの展示が行われ、とても近くで観察することができる「自然楽習園（チョウのへや）」、ゲンジボタルの幼虫を飼育展示している「ホタル展示室（ホタルのへや）」などがあり、大淀川流域の多様な生物を紹介。「見て、ふれて、楽しく学ぶ」体験型の施設となっています。

また、企画展や工作、体験教室などのイベントに参加することもでき、昆虫や魚など大淀川に生息する生き物や川について楽しく学べます。ぜひ遊びに来てくださいね！

大淀川学習館

■ 所在地：宮崎県宮崎市下北方町５３４８-1
■ 入館料：無料
■ 開館時間：９時 ～ １６時３０分
■ 休館日：
・毎週月曜日（休日を除く）
・休日の翌日（土日・祝日・休日除く）
・年末年始（12 月 29 日～翌年 1 月 3 日）
■ アクセス：
・バス / 宮交バス　国富・綾方面行きなどのバスで「大淀川学習館前」バス停下車徒歩 1 分
・JR 九州「宮崎神宮駅」下車　車 10 分

流域じまん 地域発掘

故郷の川『ななせ川』をいつまでも

大分県大分市

「ななせダム」

令和元年度に「ななせダム」が完成しました。建設に伴い、移転された方々の理解や、関係者の努力で、四季折々の風景に映える、本当に美しいロックフィルダムです。

ななせダムは、治水や利水を目的に建設されましたが、新たな地域の名所として地域振興にも一役買い始めています。ダム湖面を周遊できる付替道路や展望所には、多くの方々が来ています。

また、付替国道に隣接した道の駅「のつはる」は、令和元年11月に開園し、約11か月で10万人の来場者を記録しました。

展望広場からは、高崎山から大分新産業都市を一望。

「天空広場」

ダムを作る際に必要となる材料を採取していた場所が「材料山」です。大分市がこの跡地を整備し、「天空広場」が、令和2年の7月にオープンしました。敷地内にはサッカー場や野外ステージがあり、様々なスポーツやイベント会場として利用されています。

ななせダム周辺は、4月の山桜をはじめ、四季折々の美しい野津原の風景が楽しめます。また、天空広場では、遠くは久住連山、由布岳、高崎山、大分新産業都市など、その周辺の景観も一望できるので、是非おいでください。

「ななせダム」工事の材料山跡地を活用した「天空広場」が誕生！

多目的広場にはグランドやステージを併設しており、幅広い屋外イベントに対応できます。

野外ステージでは大盛り上がり♪

令和2年10月31日～11月1日にかけて、「ななせダムロックフェスティバル2020」が、秋日和の中、盛大に開催されました。

私たちも、唱歌「故郷」をロック調に「ウサギおいしかの山～コブナつりしかの川（がんばってるかいイエーイ）」と歌わん勢いでおりましたが、そこは、人生の先輩？として若者たちへ唱歌らしい「故郷」をおごそかに、かつ声高らかに歌いきりました。（アンコールに応えて2回）。

七瀬川流域の山や川が、忘れがたき故郷であり、思いいずる故郷、そしていつ帰ってきても美しい故郷でありますようにと祈りながら。

「ななせダムロックフェスティバル２０２０」の様子

大分市の佐藤市長にも熱唱頂きました。

若者たちに負けず、ななせ交流会は声高らかに唱歌「ふるさと」を熱唱しました。

ななせ交流会は、これからも七瀬川を活動拠点として、清掃活動や子供たちへ川遊びのフィールドとして支援するとともに、美しい野津原を後世へ残してまいります。すがすがしい秋日和のなか、久しぶりに唱歌を歌い切り、子供のころを思いだしながら、改めて野津原の魅力を感じた一日でした

寄稿：河川愛護団体「ななせ交流会」／宮成秀一郎さん

「お楽しみ会」の様子。他世代交流ということもあって、子どもも、大人も笑顔！

「ななせダム」巡視の様子です。地域のみんなで、この川を見守っています。

「ななせダム」社会科見学の様子。子ども達に、素敵な「ななせ川」を残していきたいものです。

河川愛護団体「ななせ交流会」

情分川の支川、七瀬川の流域にある大分市野津原地区。古くは熊本との交通の要所として、また、近年は大分市のベッドタウンとして発展をしてきました。この野津原地区を拠点に活動をしている「ななせ交流会」は、平成２３年に、約３０名のメンバーで発足した団体です。子供たちに川遊びの体験や、水辺での花火大会、河川清掃活動、植樹活動などを行ってきています。特に七瀬川の清掃活動は、毎月第１土曜日に行い、河川美化と併せて会員や住民相互の交流を深めているところです。

『肥前風土記』・歴史と ロマンの松浦川

佐賀県唐津市（さがからつ）

「松浦川」と「歴史」

松浦川は、佐賀県の北部の黒髪山・青螺山に発し、唐津市相知町で支流の厳木川（きゅうらぎがわ）と合流し、下流平野部に出て、支流の徳須恵川を合わせ、その後は唐津市の中心市街を貫流し、玄界灘に注ぐ約45㎞の河川です。その流れは、佐賀県北西部の社会・経済・文化の基盤をなし、治水・利水・環境上極めて重要な河川とされています。

松浦川流域は古代史のロマンが薫る場所です。太古の時代より大陸と交易があった事から、稲作文化の発祥の地ともいわれています。古くは西暦400年代に、大和政権に命を受けた、大伴狭手彦（おおとものさでひこ）が、朝鮮半島の百済救済の途中、この地で船待ちの間、長者の娘の佐用姫と契りを結びました。しかし、やがて狭手彦は船出する事となり、近くの鏡山から領巾（ひれ）を振り見送った佐用姫は、離別の悲しみに耐えかねて松浦川に身を投げ、とうとう石になってしまった…という悲恋の物語を書き残した歌碑が神集島（かしわじま）に今も残ります。

また、松浦川流域には陶磁器窯跡等、国指定史跡が13件、県指定史跡7件、その他市町指定史跡が多数あり、肥前陶器の唐津焼や伊万里焼などの陶磁器生産が古くから盛んです。

清らかな水質が自慢の厳木川

松浦川の支流の一つである厳木川は、作礼山、八幡岳という比較的高い山地を抱える急勾配の河川です。令和元年には、平均的な水質が最も良好な河川として選定されました。まさに、流域で集い、活動する同志皆さんの『宝』です。

そのような環境の中、「地域に点在する自然と歴史文化に学び、21世紀にむけ、自ら意識の向上をはかり、安心して暮らしやすい環境の創出と整備を目指す」事を目的として、「自然と暮らしを考える研究会」を設立しました。河川法が改正される直前の平成8年（1996年）の事でした。

水車をはじめとした遺構を活用

この地域の厳木川には、古来より水車を用いた灌漑が行われてきました。歴史書によると、江戸時代初期に幕府の命で新田開発を目的として「町切堰」および、川と並行する5キロの蛇行した用水路が築造されたとされています。しかし、度重なる河川の氾濫で米の収穫量が増えなかったため、さらに一段高いところを開墾し、水路に揚水式水車を8基設置して田を潤したということです。

この史実にもとづき、私たちは、地域に水車を復活させるプロジェクトに取り組んでいます。地元の唐津工業高校建築科の学生の皆さんと協働しながら、間伐材を使って、これまで8基の水車を復元しました。その中で2～3基の水車が実際に稼働しています。

完成した水車を地域の水路に設置すると、関係者や住民から歓声が沸きました。

水車の復元プロジェクトには、地元の唐津工業高校建築家の学生も参加しました。

私たちはこの周辺のエリアを『水辺と水車文化村』と位置づけ、「田んぼと水辺の楽校」として様々な体験活動を行っています。近隣の幼稚園・小中高校などの児童・生徒を対象に、環境サポーターの派遣制度を活用して「体験型の学習支援」や「夏休みリバースクール・川の安全教室」を実施しています。前者の事業は400名程度、後者の事業は200名程度を支援しており、体験活動と併せて、厳木川の河川敷除草を中心とした安全対策も行ってきました。また、3年前より松浦川流域における「災害歴史遺産関連」の石碑・構造物・言い伝えなどの調査を、武雄河川事務所との協働で実施していま

松浦川水系における、水辺の活動団体の連携

松浦川本流および支流では、様々な団体が水辺での活動を行っています。まず松浦川の支流、徳須恵川の中流域に35年ほど前に整備された、水辺の楽校を拠点に活動する団体「NPOカッパ笑話国」が、最近30周年を迎え、交流を図りました。河口より13キロ地点では、厳木川にある今村堰を拠点として、「中島地区」が催し物を開催するなどの活動をしています。

また7キロ地点一帯では、私たち「河川協力団体・自然と暮らしを考える研究会」が活動をしており、現在、次世代への引き継ぎを図っているところです。松浦川本流の14キロ地点では、15年ほど前に整備された自然再生事業「アザメの瀬」があり、さらに2キロほど上流には河川改修の遺産・旧河道を活用する「ウオーターフロント駒鳴」が活動しています。

なお、これら主たる運営団体は、地域の自治会が担っている状況にあります。10年前より官民協働による『マイリバー・クリーンアップ』作戦として、河川沿いの美化活動（拠点10か所）を毎年6月に実施してきましたが、今年は残念ながら感染症の拡大が原因となり中止となりました。

リバースクールには、幅広い年代の住民が参加。子どもの頃、川が遊び場だった先輩が、令和の子どもたちの師匠になります。

町切堰直下の浅瀬では例年、子どもたちの川流れ体験が開かれています。

寄稿：松浦川流域連携実行委員会
石盛信行さん

特集

コロナ禍での活動

こんな状況だからこそ、「知恵」と「工夫」でチャレンジ！

2020年、世界規模で広がった新型コロナウィルス。誰も経験した事がない未曽有の危機は、「九州河川協力団体」の皆さんの活動にも多大な影響を及ぼしました。

長年続けてきた活動、打ち合わせ、イベントなど。様々な活動を中止せざるを得ない状況に陥り、誰もが頭を悩ませていた中、「コロナ禍」の中でも、工夫を行い、「新しい様式・仕組み」を用いての活動を実施する団体が出てきました。

そんな皆さんの活動は多くの方々に勇気とヒントを与えて下さっています。コロナ禍の中、行われた活動の中からピックアップした活動をご紹介します。

田川ふるさと川づくり交流会

球磨川ツクシイバラの会

第３回遠賀川流域フェスタ・ナイトリバー

動画で活動を世界に発信!?

「田川ふるさと川づくり交流会」

田川ふるさと川づくり交流会チャンネル

スティホーム期間中に、世界中でおうち時間を過ごすアイデアが投稿された動画配信サイト「YouTube」。水辺で活動を行う団体も、複数団体がYouTubeでの動画配信に取り組みました。その中の一つが「田川ふるさと川づくり交流会」のチャンネルです。

出来ない事よりも出来る事を

新型コロナウイルスの感染拡大により、私たちの活動も大きな影響を受けました。しかし、活動が制限される状況下だからこそ、「出来ない事」より「出来る事」に焦点を当てたいと思いました。しかも、楽しみながら実施できる事、そして、普段は仕事をしていて、ウィークデーの活動に参加できないメンバーも一緒に出来る事を考えました。

検討を重ねた結果、私達のライフワークでもある、「小学校への河川環境学習！」を録画でやってみようとの思いが湧きました。

活動のコンセプトとして、①メンバー全員で作る。②再生回数の多さを求めるよりも、撮影している私達が楽しむ気持ちを大切にする。という事を掲げています。

また、忙しいメンバーの日程を調整する作業が大変ですが、極力みんなで作ることを第一に考えています。

動画の作成にあたっては、まず、簡単な原稿を作成した後、スマートフォン2台を使って、撮影しています。次回へつなげるために、編集を工夫し、短編でも活動紹介と、身近な川の「きれいさ」を調べる方法がわかるように心がけています。

初めての試みでもあるので、メンバー全員で動画を作っていきたいと思っています。今後も動画を繋げていきながら全員が順番に登板するような方法を考えています。その為にも、「つなぐ」を大切に、無理なく、負担にならず楽しく、そして録画は「短く要点を主に絞って」と思っています。

動画の中には、空撮映像等も交えて、
遠賀川を紹介する内容も盛り込んでいます。

今回、動画の作成・公開を通じて得られたものとして、メンバーの繋がりが深くなりました。そして、普段なかなか活動に参加できない方にも、環境学習に興味を持って頂くことができましたし、今後の学習への工夫や、アイデア等も集まりはじめ、活動に積極的に関わる姿勢が見られるようになりました。

投稿できた動画の数は、まだ少ないですが、今後は小学校に出向いての講演や活動の際に、児童にも一緒に見て頂きたいと思っています。また、地域住民向け河川環境ゼミを行っていますので、その際にも動画を利用したいと思います。

田川ふるさと川づくり交流会チャンネル

撮影の様子

打ち合わせは念入りに！

台本を入念に確認する皆さんを撮影するスタッフ。
「ジンバル」と呼ばれる、手振れを抑えるための
最新機器も使っています。

よーい！アクション！

ハイ、OKでーす！

みんなで協力して撮影してます！

収録の様子。出演者そして、カメラの後ろには
撮影スタッフ役の会員がズラリ。
さながらテレビ番組の撮影のようです。

「田川ふるさと川づくり
交流会チャンネル」
チャンネル登録＆高評価を
お願いします！

私たちに出来る事

次は「川を汚さない為に私達が出来る事」をテーマに、第一回と繋がりのある内容で、撮影・編集することを検討しています。私達は川に関わる活動を多面的に行っています。それらを、動画を通して紹介し、短編でありながらも川への関心を持って頂ける、そんな動画を撮り続けていきたいです。

その中のひとつに、毎月の定期河川敷清掃活動に於いてゴミのポイ捨ての状況、ポイ捨てがもたらす川への影響も私達の視点から短い動画でまとめてみたいと思っています。

活動一つ一つに伝えたい思いがあります、そんな思いを今回の投稿を機につなげて行くことができればと思っています。

寄稿：田川ふるさと川づくり交流会
合原由紀子さん

「ツクシイバラ」の復活と コロナ終息への願いを込めて

球磨川ツクシイバラの会

7月4日の日付が変わるあたりから、屋根を叩きつけるこれまでに聞いたことがない雨音と、避難のエリアメールが鳴り響き、明け方には警戒レベル4の避難指示（緊急）となりました。

急いで出勤したら球磨川が氾濫し、人吉市内が浸水したと聞き、私が住んでいる錦町も球磨川の増水で橋が通行止めになるとのことで出勤してきた職員を帰しました。清流・球磨川は姿や色を変え、何でも呑み込んでしまうような勢いで流れていました。

私達が保護活動をしている河川敷に咲くツクシイバラも、すっかり濁流の中でした。

球磨川の側に住んでいる職員から「家の何もかも流れてしまいました」と泣きながら電話が入りました。翌日から水とおにぎりをたくさん作り、被災した友人や職員の家に通常なら15分の道のりを約3時間かけて片づけに通い始めました。

球磨川は濁ってはいたものの、何事もなかったかのようにいつもの姿に戻り始めていました。

1ヶ月経った頃、「ツクシイバラも被災していたんだ。何かできないだろうか。」と考え始めました。新型コロナウイルス感染拡大防止の渦の中でもあり、江戸時代に描かれた疫病から人々を守る「アマビエ」のTシャツを作り、益金を自生地の再生に使おうと思い立ちました。

「アマビエは海に現れたということだけど、球磨川だったらどんな感じになるかな？」想像が動き始めました。急流球磨川の波に立ち、球磨川の象徴である鮎とツクシイバラを持たせてみました。少しとぼけた感じの表情は見る人を、ほっとさせるような仕上がりになり、色は取引先にいろんなパターンでオーダーし、ようやく決まりました。販売手段は球磨川ツクシイバラの会のFB上の受信箱と口コミで好評をいただいています。

「アマビエ」Tシャツ出来ました！

ツクシイバラは流木などの下敷きになり、その上に葛や雑草が覆いかぶさっているものの、隙間から、新しい芽が少しずつ伸び始めました。年が明けたら開花に向けての除草作業が始まります。新型コロナウイルスの猛威が収まらず、参加の呼びかけに躊躇もあり、どんな方法がいいのか会でも決めかねている状況です。

これから球磨川河川敷にツクシイバラが100年先も変わらぬ姿で咲き続けるように、「できるしこ」ではありますが、活動を続けていきたいと思っております。

寄稿：球磨川ツクシイバラの会
桑原史佳さん

遠くは北海道から。国交省の職員さんや河川協力団体の仲間の方達から購入の連絡をいただいたときは、涙が出そうなほど嬉しかったです。おかげさまで、益金が少しずつ増え始めました。

最初の購入者は東京から。「ツクシイバラ」の楽曲を作ってくれた友人であり、音楽家の石塚まみさんでした。その後も、熊本県内外から注文を頂き、温かい応援メッセージを寄せてくださる人、着心地がいい！とリピーターも増えてきました。

球磨川ツクシイバラの会
Facebook ページ

～2020遠賀川からの想い～ ナイトリバー 祈

令和2年10月30日、遠賀川では上流から下流まで、6市1町にまたがる11団体が参加し、笹尾川水辺の楽校、遠賀堀川、遠賀川河口堰魚道公園など8か所を会場に、同時に各地の水辺に手づくりの灯りがともされ、流域全体が幻想的な光のリレーでつながりました。

このイベントは「笹尾川水辺の楽校」の若手メンバーが発案したものです。遠賀川流域では、毎年7月7日に「水辺で乾杯」を開催し、流域の連帯感を醸成していましたが、企画が2年連続で降雨により中止となったことから、水辺で乾杯に替わる事業を検討していました。その中で、過去に「黒川ほたる祭り」で、川岸両側に竹灯籠を数百灯した経験もあったことから、水辺に明かりを灯す行事の開催を決定しました。

福岡県北九州市・嘉麻市
飯塚市・小竹市・田川市
中間市・芦屋町

イベントは、河川敷に明かりを灯し、遠賀川の流れのように、灯りの川にしたいとの思いを込めて「ナイトリバー」と命名されました。新型コロナウイルス感染症の終息、令和2年7月豪雨による被災地域の鎮魂と早期復興、そして、遠賀川が今以上に地域住民に親しまれ、愛される川になるようにとの願いを込めて開催されました。また、主催者である私たちにとっては、遠賀川流域の団体や機関が活動を行ってきた、流域の川とまちのおもしろさ・つながりを再発見する機会としての位置づけも強くありました。

しかし、実現には多くの課題がありました。コロナ禍の中、反対意見が多いと覚悟しました。しかし7月豪雨があり復興とコロナ禍の終息の願いを込めた「祈」の心で開催しようと決定しました。今年度の遠賀川流域フェスタの開催担当である笹尾川水辺の楽校からは、従来の集中型から分散型での開催が提案されました。その後、同会を中心に実行委員会を結成。「分散型の事業で、如何に一体感を持たせるか？」という大きな課題がありましたが、遠賀川河川事務所の協力・指導を得て、各地の会場をウェブ中継する事で一体感を表現することができました。

NIGHT RIVER

地域の方々と共に創る手作りのイベント

地域の保育所、幼稚園、小学校、中学校、老人医療施設、介護施設、児童館などの協力を得て、白地の牛乳パックに地域の方々に絵を描いて貰っての参加のお手伝いを頂きました。

来年は牛乳パックをたくさん集めておきますと言ってくれた他、幻想的で素晴らしい、凄い優しくなれる、みんなで集まる場所がまた一つ増えた、開催者全員の思いが伝わってきて涙が出そうになりました。と言ったご意見をいただきました。また、運営メンバーからも、「若手実行員会の行動力に感謝」「見事なものができた」「忙しいけれどまたやりたい」、「どの流域の作品もきれいだった」、「次は規模を大きくして開催したい」といった声が聴かれました。

感染症対策としては、密集を回避するために、積極的な周知を行わず、福岡県のコロナ対策指針に沿って、マスク等の着用やアルコールによる手指消毒、会場やスクリーンで感染症対策の情報を周知、来場者に対して個人情報の提供やCOCOAインストールの依頼、メインステージと観客の間に河川を挟むことで距離をとる）。SNS配信をPRし、来場者が増えないように注意する等の取り組みを行いました。

来場して戴いた方に感想を聞くと、一つの灯が三千個集まり描いた図形、文字が幻想的と、また、「寒いけれど何か暖かいネ」という言葉をいただきました。

寄稿：ナイトリバー実行委員長／舘林 学さん

ナイトリバー参加団体

①	北九州市	笹尾川水辺の楽校運営協議会
②	嘉麻市	遠賀川流域住民の会
③	飯塚市	遠賀川流域住民の会／飯塚川づきあい交流会
④	小竹市	遠賀川流域住民の会／小竹に住みたいまちづくりの会
⑤	田川市	田川ふるさと川づくり交流会 （田川地区河川活動団体交流会） （田川ふるさと川づくり交流会）
⑥	中間市	中間川づきあい交流会／中島自然再生協議会
⑦	北九州市	中間川づきあい交流会／堀川再生の会・五平太
⑧	芦屋町	遠賀川流域住民の会 芦屋東小学校・芦屋ジョギングクラブ・ひびきみどりの会

実施場所

・笹尾川	笹尾川水辺の楽校
・遠賀川	嘉穂水辺の楽校
・穂波川	芳雄橋
・穂波川	御徳大橋
・彦山川	番田河原
・遠賀川	中島自然再生
・遠賀堀川	遠賀堀川
・遠賀川	河口堰魚道公園

イベントの様子は　ナイトリバー　検索

第４回 九州 川の風景フォトコンテスト開催中！

「九州　川の風景フォトコンテスト」では、多くの皆様からの投稿をお待ちしております！

フォトコンテストを通じて、より多くの皆様に川の魅力を再発見してもらい、実際にその風景を見に現地を訪れたり、写真撮影に訪ねてみたりと、コロナで落ち込んだ観光復活の一助になることを期待しています。また工事現場での格好いい技術者を切り取った写真で建設現場の魅力を伝え、建設産業の担い手不足解消の一助になることを期待しています。入選作品につきましては本誌「九州かわとも」でも、ご紹介させていただくなど九州の川の風景の魅力を発信できればと思います。【九州 川の風景フォトコンテスト実行委員会】

【第１回～第３回】
九州　川の風景フォトコンテストで入選した「春」・「夏」、かつ「カッコいい河川工事写真」の作品紹介！

「九州 川の風景フォトコンテスト」とは

「九州　川の風景フォトコンテスト」は、九州の川の様々な魅力、楽しみについて写真撮影を通じて、気づいてもらうとともに、投稿写真を見た方にも川の魅力、楽しみなどを知ってもらうこと、また、これらの写真を広く紹介することで、各地における魅力ある川づくりの推進を図り、さらに、募集テーマの一つに、「カッコいい！河川工事の写真」として募集を行うことで、「建設現場の担い手不足」に対し、建設現場の魅力を知ってもらうことも狙いとし開催しました。

「川の名前」に秘められた、「ふるさとの謎」をひも解きませんか？

大分県大分市

以前、大分放送（ＯＢＳ）のラジオ番組で「リバーソング　川の歌がきこえますか？」のパーソナリティを８年間務めた。３０分の番組は川に関する話題と歌、川の活動家のインタビューで構成していたが、なぜか「川の名前の由来」についての話は出なかった。

終了後、大分市滝尾地区を流れる大分川の支流の「七歩川」の名前を知り、この『七歩』とは一体なんだろう、誰かが７歩で渡ったのか、その程度の川幅なのか、と興味を持った。

大分川に架かる宗麟大橋

川の名前は地域名に寄るものが多い。大分川に至っては、福岡川・熊本川・宮崎川などの名前はないのに大分はそのものズバリ。

福岡には那珂川、筑後川、紫川、熊本には白川・緑川など、興味をそそる名前があるのになぜ？と、更に川の名前の由来に興味がわいた。それを知ることは、地域や歴史はもちろん、身近な存在の一方、水害の怖さもある川への興味や親しみにつながるのではないかと『川の名前の由来』に取り組むことにした。

江戸時代の古地図

大分社

七歩川（しちぶがわ）

下郡校区を流れる長谷川から裏川（大分川の分流）までの約１キロメートルの川。かつては明治水路から水田を潤した水が流れ、しじみが取れるきれいな川だった。現在は地域の住宅化に伴い、家庭排水が流れ込む下水道の役目を担っている。最近、地域住民の意識改革により上流から少しずつ整備されつつある。

早速「七歩川」を調べると、読み方は「しちぶ」で、旧名は「しつぼ」らしい。

大分市は、４５０年前の大友宗麟の時代までは大分川の河原近くの「元町」が行政の中心で、対岸の滝尾地区に架けられた新しい橋の名前も「宗麟大橋」と名づけられたが、大分市は平安時代の初め頃に大分川の河原で開かれていた「河原の市」が町の発展のきっかけとなり府内（大分市の古名）の街地が出来たという。大友時代の古図にも登場するこの「七歩川」について、『伝えたい滝尾の記憶』の著者で、郷土史家の柴田義弘氏にお聞きすると、戦国時代に勢力を振るっていた「万寿寺」の敷地を流れる川の名前が「七歩川」で、おそらく僧侶の足で７歩くらいの川が引き込まれ、その後、川の流れが変化し、今の場所の小さな川にその名前がつけられたのではないかと話された。

七歩は、やはり川幅？！

また、その「河原の市」で他を抜いて高値で売買されたのが「米良米」だと言う。東九州高速道路の米良（めら）インター近くにある大分川の６つの支流のひとつが「米良川」で「七歩川」も近いが、田園風景など今は無い。大分川の土砂が堆積した肥沃な沖積平野「滝尾」を流れ、他より反当たり１俵（６０Ｋｇ）も多い収穫があったという。現在は住宅地で交通の要路の地が、かつての米どころとは驚いた。また、「滝尾」と言う地名から、上流に滝があるのかと思っていたが、「健男霜凝日子神社」（たけおしもこりひこじんじゃ）が祭られていたことから転じて「たきお」となったと言う。加えて滝尾地区の羽田（はだ）には「大分社」という大分の地名になった旧一の宮もある。古代から近世まで現在の大分市街地よりはるかに発展していた町があったのだ。

名前の由来や土地の歴史を知らなければその土地を知ることは出来ない。地名の研究は進んでいるが川の名前はどうだろう。その由来を知ることは「川」を知り、もっと川を身近な存在にさせることだろう。あなたも川の名前の由来の旅に出かけて身近な川の名前の由来、探ってみませんか。川をもっと身近にするためにも、あなたの情報をお待ちしています。

おおいたリベイラ　松村紅実子

「川の名前」から、ふるさとを知ろう！

川あそび情報誌「九州かわとも」を
支援していただいている賛助企業の皆様

(株)有明測量開発社
〒860-4108
熊本市南区幸田二丁目７－１

(株)池田建設
〒861-5401
玉名市天水町小天7371

いであ(株) 九州支店
〒812-0055
福岡市東区東浜1-5-12

応用地質(株) 九州事務所
〒812-0018
福岡市博多区住吉3丁目1番80号

(株)大本組 九州支店
〒810-0041
福岡市中央区大名2-4-30

(株)奥村組 九州支店
〒805-8531
北九州市八幡東区山王2-19-1

(株)柿原組
〒810-0022
福岡市中央区薬院3-4-21

技研興業(株) 九州営業所
〒812-0007
福岡市博多区東比恵2丁目20-25

(株)九州開発エンジニヤリング
〒862-0912
熊本市東区錦ヶ丘33番17号

九州建設コンサルタント(株)
〒870-0946
大分市大字曲９３６番地１

(株)九州建設マネジメントセンター
〒812-0013
福岡市博多区博多駅東2丁目5番19号

九州電力(株)
〒810-8720
福岡市中央区渡辺通２丁目1-82

(株)共同技術コンサルタント
〒880-0824
宮崎市大島町山田ヶ窪1926-1

(株)建設技術研究所 九州支社
〒810-0041
福岡市中央区大名2-4-12

国際航業(株) 九州支社
〒812-0013
福岡市博多区博多駅東三丁目6番3号

五洋建設(株) 九州支店
〒812-8614
福岡市博多区博多駅東２丁目7-27

砂防エンジニアリング(株)
〒350-0033
埼玉県川越市富士見町３１－９

清水建設(株) 九州支店
〒810-0004
福岡市中央区渡辺通三丁目6番11号

第一復建(株)
〒812-0006
福岡市博多区上牟田1丁目17番9号

(株)大進
〒890-0016
鹿児島市新照院町21番7号

中央開発(株) 九州支社
〒814-0103
福岡市城南区鳥飼６－３－２７

(株)東京建設コンサルタント 九州支社
〒812-0016
福岡市博多区博多駅南2丁目12番3号

飛島建設(株) 九州支店
〒810-0004
福岡市中央区渡辺通5丁目14番12号

(株)西技計測コンサルタント 九州営業所
〒826-0041
田川市弓削田見立３１７５

(株)西日本科学技術研究所
〒780-0812
高知市若松町9番30号

西日本技術開発(株)
〒810-0004
福岡市中央区渡辺通1丁目1番1号

日鉄鉱コンサルタント(株) 福岡支店
〒820-0053
飯塚市伊岐須１－３５６

日本工営(株) 福岡支店
〒812-0007
福岡市博多区東比恵１－２－１２

(株)ニュージェック
〒531-0074
大阪市北区本庄東２丁目３番２０号

(株)不動テトラ 九州支店
〒812-0011
福岡市博多区博多駅前4丁目1番1号

松尾建設(株)
〒840-0842
佐賀市多布施一丁目4番27号

松本技術コンサルタント(株)
〒871-0161
中津市大字上池永1285-10

三井共同建設コンサルタント(株) 九州支社
〒812-0013
福岡市博多区博多駅東2-14-1

牟田建設(株)
〒842-0103
佐賀県神埼郡吉野ヶ里町大曲1756

◆川あそび情報誌「九州かわとも」事務局 編集後記

「新型コロナウィルス」の感染拡大にはじまり、「令和２年７月豪雨」の発生など、「九州河川協力団体」の皆様におかれましても、大変な１年だったと思います。そのような中、「かわとも　第３号」は本当に製作出来るのか？編集委員メンバーも当初悩みましたが、いざ記事が届きだしてみると、コロナ禍の中でも、様々な工夫をして活動された皆さん、令和２年７月豪雨発生後、それぞれの地域の為に、流域をも越えた連携で支え合い、励まし合う皆様の姿に、勇気を頂きました。

そんな皆さんの姿を少しでも多くの方々に届きたい。そんな思いで製作してきた今号は、皆さんの「川への想い」に溢れた１冊となりました。

ぜひぜひ、手に取ってご覧頂ければと思います。また、今まで「九州河川協力団体連絡会議」の皆様の活動に触れる機会の無かった皆様にも知って頂く「きっかけ」となれば幸いです

■九州河川協力団体連絡会議

■(一社)北部九州河川利用協会内
〒839－0801　久留米市宮ノ陣3－8－8
TEL:0942-34-6733　FAX:0942-32-6977

九州かわとも

九州の
川遊び情報募集中！

KYUSYU KAWA TOMO

九州の川で色々な活動をしている皆様！
「九州かわとも」編集局までぜひ情報をお寄せください。
お待ちしております。

川あそび情報誌「九州かわとも」事務局（一社）北部九州河川利用協会内
TEL：0942-34-6733　FAX：0942-32-6877　MAIL：kawatomo.mk@gmail.com

川あそび情報誌
九州かわとも「やっぱり川へ行こう」
2021年春号（Vol.3）
2021年3月31日発行
編集発行：「九州かわとも」編集局
事務局：九州河川協力団体連絡会議

第１回九州川の風景フォトコンテスト Instagram 部門 優秀賞「川の楽しさを感じる写真」
熊本県　大宮地川